



# インドネシア「華人」女性の個人史：マ・ニオからの考察(前篇)

貞好, 康志

---

(Citation)

近代, 91:61-78

(Issue Date)

2003-05

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001570>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001570>



# インドネシア〈華人〉女性の個人史

——マ・ニオからの考察——（前篇）

貞好康志

はじめに

本稿は、筆者がインドネシアで知り合ったある老女との出会いから別れまでの経緯と、その中で見聞きした彼女の生活・人生についての情報を整理分析することを通じ、この国の中国系住民（以下、華人）の社会のあり方や、現代インドネシアにおいて「ひとが華人であること」の意味合いを、個人という切り口から考察しようとする試みである。

歴史学や社会学の分野で、人間と人間社会のあり方を研究する分析上の対象単位として個人がクローズアップされるようになった比較的最近の画期は、わが国においても世界的にも一九七〇～八〇年代だった。<sup>（注1）</sup>その動向には、従来の歴史学や社会学の分析枠組や依拠資料についての反省が込められていた。歴史学の分析枠組でいえば、「国民」や「民族」や「階級」等のきわめて抽象的な集合名称を主語に立て叙述する方法に対し、より実体的な存在としての個人にとって「生きられた歴史」を採集・再構築する必要と意義が認識されてきた。社会学においては、アンケート

調査や統計分析に典型的なように様々な特定の側面に分断されがちだった人間存在を再統合して考えるための単位として、個人が改めて注目されたというのが一つの理由であつたろう。

ここでの個人とは多くの場合、文献資料で跡づけられる政治権力者や自ら書く知識人などであるよりむしろ、自ら文字記録を残すことが少なく、しかも旧来の学問（特に歴史学）があまり対象としてこなかった人々、すなわち社会の圧倒的多数を占める庶民（なかでも政治的・社会的に周辺化され学問的にも軽視されてきたマイノリティ・女性・被抑圧者等）であることに、積極的意義が見出されてきた。いきおい個人に着目する研究は、対象領域として、政治史・事件史より、私的な生活史をまず中心に据え、その上で人々の体験から浮かび上がる国家的・世界的な出来事との交叉の諸相にも新たな光を当ててくることを目指す傾向を持つ。これらのことと関連し、また人類学や民俗学など隣接諸学からの影響もあつて、方法的には、オーラル・ヒストリーすなわち口述された体験史の調査者による聴き取りと記述という手法が積極的に用いられてきた。

本稿は、こうした個人への視点と口述聴き取りの方法を、筆者が十年來の研究対象としてきたインドネシア華人および華人社会に関する考察の一環として応用しようとするものである。インドネシア華人については、個人を対象とする研究はいまだ非常に限られている。散見される既存研究の大半も、オランダ植民地当局によってマヨール・カピタンなど華人社会の頭目に任命され、そのことよつて文献史料に名を残した支配層か、二十世紀以降では政治的な唱導者や著名な企業家など（いずれもほぼ男性のみ）に対象が偏つており、いわゆる市井の人々についてはほとんど先行研究がない<sup>(注2)</sup>。

筆者はかつて、一九三〇年代を中心に華人社会の指導者として活躍したある人物について、生前の彼を知る人々からの聴き取り調査を文献調査と併用し、一論考を発表した「貞好 1993」。その研究を通し改めて確認したことの一つ

は、アジアの「近代」（インドネシアを含め概ね十九世紀半ば以降と考える）において、「個人」の持つ意味合いは、おそらく世界の他地域とも共通して、格別だったということである。

近代とは、世界中で民族や国家の自主独立が目指された時代であったと同時に、それらの集団を構成する最小単位たる個人の自立が叫ばれた時代でもあった（その意味で近代は現在まで連続している）。それは、人々の生のあり方が「国民」をはじめとする新たな集団単位に絡め取られ意味づけられていった時代である一方、新旧の社会集団のありようを説明することで、そこに所属する個々人の生き様や思想のあり方をカバーし切れなくなった時代でもある。自立を目指すことで個人の生が多様化した、あるいは個の自立が是認されることによって（むしろ全体社会との葛藤は生じるがそのためにいっそう）人々の生のあり方の多様さが露わになったと考えられよう。

インドネシアの華人についても同様である。十九世紀末以降、植民地における外来マイノリティとしての華人の集団的アイデンティティが政治問題化し、「中華民族」という概念に連なる「華僑」という呼称が新鮮味をもって迎えらる。と同時に、そのような集団概念では括りきれぬ、あるいは従来帰属してきた集団の特性や帰属すべき集団の枠組さえ自覚的に変えてゆこうとする個人が誕生・増大してゆく。例えば先述した筆者の研究は、華人の間に中華ナショナリズムが普及する大勢に抗し、未来における植民地の独立を見据え「インドネシア・ナショナリズムを志向」しようとした先駆的な華人についてだった。

歴史研究から進んで現代インドネシアの華人社会の実態を把握しようとする場合には、いっそう個人という単位を重視せざるを得ない特有の事情もある。商業に代表される生業の都合もあって、特にジャワでは華人の大半が村落を形成するより都市に少数者として住んでいること、しかも植民地政策によって華人居住区に閉じ込められた（特定地区の近隣コミュニティをほぼそのまま「華人社会」と同定できた）時代が二十世紀初頭に終焉し、以後百年は次第に

居住空間が拡散してきた傾向がまずある。加うるに、一九六〇年代半ばから三十年以上にわたったスハルト政権の「同化政策」によって、「華人コミュニティの不可視化」というべき事態が進行してきた。<sup>(注3)</sup> 国民統合政策の中で華人は一つのエスニック集団として公式には認められず、かろうじて「個人の集積としてのみ認められる存在」「加藤[1990]となったのである。個人に解体された存在であるということとは逆説的に、スハルト政権期には華人という集団カテゴリーに付加されたステレオタイプ（典型的には権力者と癒着した悪徳実業家、不信心な金持ち男性のイメージ）も横行してきた。

スハルト政権自体は一九九八年に交代を余儀なくされたが、上述した華人をめぐる状況は現在まであまり変わっていない。こうした状況に対する半ばは適応戦略として、またそれ以上に風穴を開けるアンチテーゼとして、多様で具体的な個人のありようを一例でも多く生活の現場から採集し叙述することに、積極的な意義を見出したい。本稿はそのためのささやかな第一歩である。

## 第一節 出合いの頃とマ・ニオの語り

本稿で取り上げる人物は私の中でマ・ニオ(Ma Nio)と呼んでいる女性である。彼女と初めて出会ったのは、私が大学院博士課程に進学した一九九五年の七月から九月にかけて、インドネシアで一ヶ月半ほどの予備的なフィールド調査を行なった際のことであった。たまたまその年、大学院（京都大学人間・環境学研究所東南アジア地域研究専攻）で加藤剛教授の社会動態論という授業に参加していた。この授業では「個人史の中の社会史」というテーマのもと、学生が任意に選んだ具体的な個人にライフ・ヒストリーの聴き取りを行なうことを通じて、「個人の人生と、

その人が生まれ・生き・死んでいく社会との交差を歴史的な位相の中でどのように捉えることができるかを検討する」という目標が掲げられていた。私は年度末（一九九六年一月提出）のレポートにマ・ニオとの出会いを取り上げ、「〈個人史の中の社会史〉へ向けて―イブ・シティからの考察」と題する小文を綴った。

当初私はマ・ニオのことをイブ・シティと呼んでいた。イブ (Ibu) はインドネシア語で家族関係としての「母」や呼びかけとしての「お母さん」を意味する単語で、自分より年長もしくは社会的地位が上とみなす女性一般に対しても固有名詞の前につけたり、単独で用いられる。従ってイブ・シティは「シティ母さん、シティおばさん」の意である。他方マ (Ma) は福建語で父方の祖母またはその年代の女性に用いる呼称に由来するものである。<sup>(注4)</sup> つまり、マ・ニオは「ニオ婆さん」といった意味の華人式表現といつてよい。インドネシアで華人女性をあえてインドネシア式に「イブ・シティ」と呼ぶのはかなり形式ばったニュアンスを伴うのに対し、「マ・ニオ」の方がよりうちとけた語感がある。私が彼女をマ・ニオと呼ぶに至った経過については後述する。

以下、まず本節では、上述のレポートを下敷きに、マ・ニオ||イブ・シティとの出会いの様子を、また次節ではその頃私が考えていた事柄を、若干の説明的加筆以外はなるべくレポート作成当時の文章のまま再録してみる。

## 出会い

聴き取り対象者を中部ジャワのスマランに求めた際、私にはそれまでの自分の研究テーマ（インドネシアの国民党統治と華人住民の關係の歴史的考察）の延長として、華人と呼ばれる人々の生活実態へ迫りたいという思惑があった。主に国家の側が立てるカテゴリーとしての華人をめぐる諸問題を、もっぱら政治史の観点から考察してきた方法に一区切りつけ、もう少し生活の現場に近い所で、政治的な諸事態の内実をも捉え直してみようと考えたのである。

中部ジャワの豊かな野山を背後に控え北岸の要港として発展したスマランは、中国出身者の渡来や移住を古くから

記録し、オランダ植民地期に形成された同国有数規模のチャイナタウンが、人口百万余の州都となった今日なお下町に残ることで有名である。とはいえ、一九九一年（インドネシア留学の後半期）の一年弱をこの町で過ごした経験から、私はいまやチャイナタウン周辺に華人だけが生活しているわけではないこと、華人の居住も町の各域に拡がっていること、また出会った人に面と向かって「あなたは華人ですか」などと聞けるものではないこと等をそれなりに心得ていた。他方で、マイノリティである華人について考えようとするなら、彼（女）らを取り巻くマジョリティの人々（「土着のインドネシア人」の意でプリブミと総称される。スマラン周辺では圧倒的にジャワ人が多い）にも眼を向けなければなるまい、といったことを聴き取り相手の選定にあたって心がけようとしていた。

イブ・シティに出会ったのは一九九五年七月二十一日の夕刻、古い中国式寺廟やショップハウスの連なる卸問屋街などチャイナタウンの中心からややはずれた、埃っぽいデコボコ道に面して立つ「和合会館」（実際には漢字でなく、HOO HAP HWEE KWANと福建語音のアルファベット表記のみが入り口に掲げられている）を訪ねた時である。

中国旧暦（農曆）六月二十九・三十日にあたる両日は、遠く十五世紀初頭、明朝の提督鄭和がスマランに上陸した日だとされ、この地を中心とする華人の間で毎年大祭が催される。<sup>(住)</sup>その祭りに龍・獅子の舞いを奉納する青少年団の一つがこの会館を本拠としているらしいことを、私は数年前の滞在中にメモしていた。今回本格的にこの祭りを取材するに先立ち、青少年団の練習に飛び込みで行ってみようと考えたのである。紛れもなく「中国的」な鄭和祭のため和合会館で準備に励んでいる人々といえ、あの億劫な問い「あなたは華人ですか？」を改めて口にする（というよりそれができず胸の中で逡巡する）必要もなからう、安んじて「華人社会の実態」を観察できる筈、と踏んでいた面もあった。

留学時代から幾度か傍らを通りかかったものの、何かガランとして取りつくしまなく感ぜられた灰色のコンクリー

ト二階建ての会館、その埃道に面した門の外から思いきって何度か声をかけた時、奥の方からサンダル履きで現れた白髪の婦人―小柄な、痩せた体に質素なワンピースをまとい、浅黒い、やや彫りの深い顔立ちで初め用心深そうに、けれども優しいジャワ語で応対してくれた女性が、会館のただ一人の住み込み管理人、イブ・シテイだった。私は華人の会館に長年住んできたというこの老婦人に興味を覚え、祭りの取材とは別に色々話を聞いてみようとの心の中で決めた。

### 触れ合いの形

七月下旬から九月初めにかけて前後八回、いずれも彼女が住み働く和合会館で、私はイブ・シテイと会った。彼女と会うただけに会館を訪れたのは最後の二回のみで、あとは鄭和祭をはじめとする様々な行事や寄り合いの合間に少し言葉を交わしたり、遠くから微笑み合ったりという場合の方が多かった。いきなり飛び込んできたよそ者の私を、会館出入りの老人や青少年ら結果的に百人近い人々へ引き合わせてくれたのはイブ・シテイだったから、私は彼女に感謝の気持ちを伝え続けたかったし、彼女の方も、私が人々と話し込んだり、彼女が用意した食事や飲み物を皆と口にしての満足を満足そうに眺めている風であった。

彼女は会館の仲間とは主にジャワ語で話していたが、この地方語を満足に出来ない私とのやりとりでは国語であるインドネシア語を使ってくれた。私がたまたまジャワ語を母語とする同伴者(妻)と一緒にだった最初の出会いと最後の二回には、イブ・シテイはジャワ語の方を好んで(つまり私より妻に向かって)語った。多くの男衆が出入りする会館を一手に切り盛りしているだけあって、彼女は決して内向的でなく、忙しく立ち働しながら時には若衆や悪童を大声で怒鳴りつけることさえあった。かといってお喋りやおせっかいというわけでもなく、特に自分のことについては少しはにかみながら私の問いに答えたり、問わず語りにポツポツ話してくれるという調子だった。

## イブ・シティの過去

彼女の生い立ちや家族関係・履歴について彼女自身が折に触れ語ってくれた、あまり多いとはいえない事柄を列挙してみる。

(A) 一九三三年頃(当年七十二歳という歳から逆算)中部ジャワのソロで生まれた。

(B) 兄・姉が一人ずついた。

(C) オランダ植民地時代に小学校程度の学校教育を受けたが「日本軍の来攻などのため」中断した。

(D) 若い頃一度結婚したが、運転手だった夫は事故のため二十七歳で早逝した。以来独身である。子供ももうけなかった。

(E) 兄は日本軍政時代、タナカという名の日本人に従って仕事をした。そのためインドネシアの独立革命期、同じ民族同胞 (sesama bangsa) の手で遠くアンボン辺りで殺された。兄の死は神の定めた仕方のない運命 (takdir) だった、と今は思っている。

(F) 自分は看護婦や工場労働などあれこれの仕事でインドネシア各地を転々とした。スマトラへ渡ったこともある。若い頃には不良めいた (hakai) こともやったが、歳をとるにつれおのずとそうしたことはなくなった。

(G) 結局スマランに落ち着いて約三十年、和合会館の住み込み管理人をやるようになってから二十年ほど経つ。

(H) 兄と姉の子つまり甥姪が十人、その子供である「孫」(cucu) たちが十三人、スマラン、ソロ、ジョグジャカルタなど中部ジャワ各地に住んでいる。

(I) 自分の生まれ故郷で母方の墓もあるソロにはレバラン (イスラームの断食明け大祭) の季節に帰省する。

イブ・シティの現在（一九九五年当時）

以下私の印象を交える。会館が開いている昼間や何かの行事で人の出入りが多い夜には、彼女はあれこれ忙しく立ち働き楽しそうにも見えた。だが、会館が休みの日や一人で過ごしている夜、イブ・シティが孤独の中で不安と諦観に揺れているらしいことに私がうすうす気づいたのは、そのような時間にふらりと訪ねた時であった。

(J) 病気の不安がある。二年前バスの中で心臓の発作で倒れ、気がついたら病院に運ばれていた。そのほか高血圧や胸の腫瘍を抱え、昔は太っていたのに今では痩せてしまった。

(K) 姪の一人が近所に住んでいる。イブ・シティは時々彼女の家に立ち寄ってテレビを観ることなどもあるが、夜は必ず会館に帰ってきて一人で寝る。

(L) 会館で一緒に時を過ごす唯一の友は、犬のトニーである。皮膚病で毛が抜けたこの臆病そうなオス犬のほか、彼女は近所のノラ猫や会館の台所に毎夜出没するネズミにもよく餌を与えている。「私たちと同じ生き物 (mahluk, 神の被造物の意)」であるネズミに毒餌を撒くなど考えたこともない。まして「イスラームで禁じられている犬肉を食べる人達」の気持ちは測りかねる(トニーの先代の犬は近所の人に捕まって食べられたらしい)、などと云う。

(M) 「いつでもお迎えの覚悟はできているさ」と繰り返す一方、「毎夜不安で眠れない」とも打ち明ける。漢方やジャワの生薬のほか、西洋の睡眠薬も試している。

(N) 市内のミッシェン系の病院でシスターをしている姪の勧めもあり、最近プロテスタントに入信した。教会へも足を運んでいる。

## 第二節 考察①個人の生とエスニシティ

彼女のエスニシティ（ここでは、あるエスニック集団への「帰属性」を指す）について私が見込み違いをしていたらしいことに気づいたのは、出会いから三週間ほど経った頃、彼女と近い間柄の第三者の言葉を通じてだった。イブ・シティは見方によっては「華人で（も）ある」ことが判ったのである。

私はそれまで、彼女は華人の会館にいる「生粋の」ジャワ人だろうと（後から振り返れば半ば期待をこめて）考えていた。容貌など外見の印象もさることながら、むしろ華人を含めジャワの都市部で見かける人々のエスニシティを外見では即断し難いことをそれまでにたびたび経験していたから、主な判断基準は話し言葉であった。

初めて彼女に会った際、私の同伴者は、イブ・シティのジャワ語を「本物だ」と評した。ジャワ文化の模範的中心である（と彼女自身誇りとする）ジョグジャカルタの王宮近くに生まれ育った私の連れ合いは、他所で話されるジャワ語がいかに耳障りか、特にスマランなど北海岸地方の華人が口にするジャワ語がどれほど舌足らずな代物か、得々と解説してくれるのが常だった。それが、イブ・シティはさすがにジョグジャカルタと並ぶ古都ソロの出身だけあって、純正の (yang asli) ジャワ語を話す、と誉めるのだった。

もう一つは宗教である。彼女の正式名シティ・ロハニ (Siti Rohani) はイスラーム風だ、とこれまた生来のムスリムである連れ合いが指摘してくれたのが、思い込みの始まりだった。私は宗教についてイブ・シティに質したことがなく、お祈りの姿を見たわけでもなかったが、言葉のはしはし（例えば犬肉の件やレバランの帰省の話など）から、彼女はムスリムだろうと考えていた。彼女自身から「キリスト教に入信した」と聞かされた後も、改宗以前はおそら

く名目的な面の強いジャワ風のムスリムだったのでないかと推測した。ムスリムであることは必ずしもインドネシアで「華人である(ない)こと」を含むエスニシティと直接の相互規定関係にはないが、華人会館に住むイブ・シティがなお／却ってイスラームを奉じていたという、どこか意外な組み合わせへの期待を込めた想像が、「彼女はジャワ人である」という私の思い込みをいっそう助長したものであろう。

イブ・シティが実は「中国人」の父と「ジャワ人」の母から生まれ、本人もタン・ギョク・ニオ(Tan Gok Nio、漢字表記は筆者が推定するに「陳玉娘」という中国名を持つことを教えてくれたのは、和合会館に昼間だけ通ってくる当時三十八歳の女性ンバツ・トゥン (mbak Tun, 正式名 Kusumiyatun。mbak は通常自分より年長の女性を呼ぶジャワ語の呼称だから、ンバツ・トゥンは「トゥン姉さん」の意) だった。スマラン生まれのンバツ・トゥンは、小さい頃きょうだいの多い生家の子守り兼お手伝いだったイブ・シティに実の娘のように可愛がられ、十五年ほど前からイブ・シティの紹介で会館の事務員として勤めてきた人である。既に二児の母ながら、美人で会館の男衆や少年たちに絶大な人気のあるンバツ・トゥンは、イブ・シティについて上記の話をしてくれた後、私自身はムスリムでプリブミよ、と念のためといった風に自ら言葉を足した。

実はイブ・シティ自身、最後の面会のとき問わず語りに、父が広東生まれの中国移民だったこと、インドネシア語はできなかつたこと、「阿片の吸いすぎで早死にした」ことなどを、「母はジャワ人だった」ことと共に話してくれた。これに数日先立つ昼間、会館の男衆が、彼女は我々のうちではマ・ニオと呼ばれているんだ、ということを彼女の前で何かからかい言葉と共に私に教え、イブ・シティ・マ・ニオが顔を赤らめて彼を追いかけて回す、という一幕があった。彼女が父親のことについて自ら語ってくれたのは、もしかすると、彼女をずっとイブ・シティ(または単にイブ、あるいはその省略形のブ)とジャワ／インドネシア式に呼んできた私に対する、どこか釈明のような気持ちがあった

のかも知れない。

## 華人性の社会史

マ・ニオ（私も次第に彼女のことをそう呼ぶようになったので、以下の記述ではイブ・シティに代えこちらの呼称を用いる）について一九九五年当時私が知り得た（と考えた）事柄は、二ヶ月足らずで私が帰国したこともあってあまりに限られ、その点でも彼女個人の人生を何らかの社会史と絡めて描くことはおぼつかなかった。ただ、どれほど時間が許され手持ちのデータが増えたとしても、その中の何を選びどう構成するのかは結局、誰々の、もしくは何の、いつ・どこの社会史を描こうとするのかという書き手の意思や、（得られたデータの側により重きを置くなら）どのような社会史の枠を設定するのが最も意味かつ可能なのか、という見究めにかかっていることに変わりあるまい、と思われた。結局、私はマ・ニオについての物語の体裁で「個人史と社会史」のレポートを書くのではなく、続けて次のような考察を行なった。

マ・ニオの事例に即して言うと、例えば今世紀のジャワないしインドネシアという大きな時空枠の中で、オランダ植民地期・日本占領期・独立インドネシアの半世紀、という激動の時代を、一人の、特に若くして寡婦となった女性が、いかに社会と交わり生きてきたのか、その中で周りの社会や時代をどのように見つめ現在に至っているのか、といった観点から（さらに材料を得た上で）一箇の歴史を叙述することはそれなりに可能だろう。

その場合、前段で問題にしたように彼女のエスニシティにこだわる必要は、必ずしもないかもしれない。実際、マ・ニオの過去と現在について私が得た情報の大半たる（A）（N）のうち、直接エスニシティと関係する、すなわちエスニシティへの言及を抜きに語り得ぬ事柄はひとつもない。彼女を二十世紀インドネシアに生きた一人の女性とし

て捉えるのは、その限りでニュートラルな立場と言えるかもしれない。

だが、少なくとも私がマ・ニオの人生についてさらに考え語ろうとする時、あえてエスニシティを無視する「色盲」法はあまり適切でないと思う。それは、私の当初からの関心ゆえにというより、むしろ彼女とのやりとりを通じ、また今それらを振り返って感じることである。彼女を例えば「人類社会に生きた一人の人間」と見るより「二十世紀のインドネシアに生きた女性」と捉えた方がそうであるのと同様、彼女のエスニシティをも問題とした方が、彼女にとってより具体的で深みのある社会史の枠組（個人史の舞台）を用意することができるし、ひいては彼女の人生に有意義な事柄をその分見逃さずにすむと思われるからである。マ・ニオが華人会館に住んでいる事実ひとつとっても、彼女のエスニシティ如何で、私の捉え方はむしろ、彼女自身にとっての意味合いも随分変わってくるに違いない。

「兄が殺された」という、おそらく彼女の人生で（夫の死と並ぶ）最も衝撃的な事件に際し、マ・ニオは民族同胞（*sesama bangsa*）という表現を口にした。彼女の兄がエスニシティの上で周囲からどう見られていたかは定かでないが、いずれにせよ日本軍と協力したがゆえに「中華民族」から殺される、という状況は当時のインドネシアでは少し考えにくい。おそらく日本に協力した「中国人」として、革命途上の「インドネシア民族」に殺された、という想定の方が蓋然性は高い。その場合、少なくともこの言葉を口にした現在のマ・ニオにとって民族同胞とは、中華民族・華人ではなく、インドネシア民族だということになる。そのような自己規定と、例えば「阿片に溺れた中国人」を父に持ったことや、「ジャワ人」だった母への想い、あるいは兄の死そのものがどう関係するのか、さらに彼女自身、結局老境を華人の会館に託していることはどのような意味を持つのかなど、いずれもマ・ニオの人生にとって、またそれを包む社会史にとって、重要と思われるテーマがあれこれ浮かび上がってくる。

マ・ニオのエスニシティに注目するといっても、問題は彼女が華人かジャワ人かといった二者択一ですむ話ではな

さそうである。もし彼女の人生にエスニシティ帰属が意味を持ったとすれば、それは何か自明の定義から人生の諸事象が出発したというより、おそらく本人にとっても他人にとってもそのような定義のし切れなさが常につきまとう状況が片方にあり、にもかかわらず人生の重大局面やふとした日常の中で、自己や他者によるエスニシティ規定がその時・その後の人生のかたちや意味づけに様々な影響を及ぼした、という点においてではなかったろうか。

従来、特に歴史叙述的な研究は、あるエスニック集団の社会集団としてのまとまりを自明のごとく主語に立てるか、せいぜい社会学や人類学にならって当該エスニシティの基準を定め、対象を特定・限定する手続きから出発することが多かったと思う。少なくともインドネシアの華人については、まず「華人とは誰か」を定義し、必要に応じサブ・カテゴリーを設けた上で、その全体または一部たる「華人社会」の歴史を語る、という手続きがなされればましな方であった。

そのような方法からすれば、中国系移民を父、ジャワ人を母にインドネシアで生まれ、ジャワ語を母語とするマ・ニオは典型的なプラナカン (Peranakan) に分類される。中国移民が持ち込んだ父系中心の血統観念や親族形態、それを部分的に反映したと思われるオランダ植民地政府の対華人政策 (国籍法や住民登録法など)、さらにそれらと関連しつつ展開した中華／インドネシア両ナショナリズムの影響などから、インドネシアのプラナカンはあくまで「華人」のサブ・カテゴリーとして自他ともに捉えられることが多かった。

——と、今述べたような私の予備知識は、彼女の人生史の背景を理解する上で一定の役に立つことがあるかもしれない。だが、プラナカン華人という規定それ自体は、マ・ニオという特定個人の人生の諸々の実相 (例えば A-N で列挙した事柄) をいかほど説明してはくれない。

かつて一九五〇年代半ばの調査に基づき「スマランの華人」を著した社会学者ウィルモットは、スマランにおける

華人 (Chinese) およびその人々からなる社会 (A Community) の特定に楽観的だった。彼は「最も同化の進んだ人々でも中国式の名を保持している」として個々人の名前を華人性の指標とすることができたからである [Willmott 1960]。

マ・ニオの例にみた通り、今日では表向きの名前を頼りにこうした「識別／特定」から出発することは難しい。それは何より政治的な環境変化がもたらした結果である。スハルト政権が華人同化主義 (華人性の抹殺ないし不可視化) を国策として以来、国籍を得た華人に同化の象徴的行為としてインドネシア風の帯名が奨励され、相当浸透したのである。同化主義の政治力学は、国家と個人の関係にとどまらず、人々の日常の (例えば呼称にはじまる) コミュニケーションの形にも影響を及ぼす。この時、それだけでなくも他者について調べ書く研究実践の倫理の問題を抱える研究者は、国家や人々がそれを挟んで応酬し合っている同化主義の政治性に巻き込まれざるを得ない。

マ・ニオの場合にみられたごとく、もし華人であるという自明の規定の上に人生が展開するというより、むしろそうした規定のし切れなさが生活につきまといているとするならば、上記の政治力学と絡む研究実践の難易の問題をいったん別にしても、「華人である」人々の歴史たる「(どこどこ) 華人社会史」や、逆にア・プリオリに想定した「華人社会」に個々人の生を還元する「ある華人の社会史」すら、それほど完結的に書き得ないのでなかろうか。

マ・ニオのような人生を拾いあげつつ、しかもエスニシティの問題を切り捨てずに書き得る歴史があるとすれば、それは彼女の「華人性」を識別しようとしたりできなかったりする書き手の思惟態度や揺れを含む (ゆえにその背景となる政治や思想の問題をも含む)、人々の「華人である (ない) こと」の取り扱い方や自他への帰結のありようについてではないか。ウィルモットの調査期と大きく異なる現状 (それは「特定」調査が難しい分、逆にこうしたことを考えるのに適しているのかもしれない) から遡って、例えば「複合社会」と安易に語られがちな植民地社会の、人々

にとつての実相を再検討する余地も生じてこよう。その時描かれるのは、「華人社会史」というより「華人性の社会史」と呼ぶべきものになるだろう。

以上のようなレポートを記してから半年後の一九九六年七月、私は一年間の調査許可をインドネシア当局から得て、再びスマランを訪れた。以後この町を拠点にジャワの華人や華人社会の実態について様々な角度から調査を行った。その最中にマ・ニオとは思いがけず突然の別れを迎える。その前後、彼女について新たに意外な「事実」が判明する。その経過と判明した事実の詳細、またそれらを踏まえて筆者が再考察したことがらについては、稿を改め後編に譲りたい。

(続く)

【注】

- (1) [中野1977]、[歴史学研究会1987]、[Thompson 1988]、[中野・桜井1995]などを参照。
- (2) [Nagelkerke 1982] 等参照。いくぶん例外的な最近の研究として、二十世紀前半の華人知識人たちの政治思想に重点をおいた列伝であるスリヤディナタの著作(特に[Suryadinata 1983]、本文中に述べた[貞好1993]もこの系統に属する)や、自らの家系について調べた[Widodo 1997]、華人の「老女」についての聴き書きを収録した[Williams 1991]などがある。
- (3) 華人に対する「同化政策」とそれがもたらした華人コミュニティの「不可視化」については、[貞好1996, 2000b, 2002a, 2002b]を参照。
- (4) 北京官話で、自分の母親や年配の女性を呼ぶ「媽媽」のくだけた表現として単独で「媽」を用いることもあるので、こちら

の可能性も若干残る。

(5) この祭りの詳細と今日的意義については後に「貞好2002a」で分析した。

### 【引用文献】

- 加藤剛、1990、『エスニシティ』概念の展開「坪内良博編『東南アジアの社会』弘文堂。
- 貞好康志、1993、「華人がインドネシア・ナシヨナリズムを志向した時…コー・クワット・チョンの軌跡より」『南方文化』二十輯。
- 、1996、「インドネシアにおける華人同化主義の国策化…ブラナカンの志向と政治力学」『東南アジア 歴史と文化』二五号。
- 、2000a、「『民族性』と『在地性』—ジャワの鄭和祭にみる交錯」福井勝義編『近所づきあいの風景—つながりを再考する』、昭和堂。
- 、2000b、「スハルト体制末期インドネシアの『華人』カテゴリーをめぐる諸相—中部ジャワ・スマランでの調査より」『国際文化』第二号。
- 、2002a、「ジャワで〈華人〉をどう識るか—〈同化政策〉三十年の後で」平成十一〜十三年度科学研究費補助金基盤研究(A)。(2)『東南アジア社会変容過程のダイナミクス—民族間関係・移動・文化再編』研究成果報告書(研究代表者・加藤剛)。
- 、2002b、「ジャワ華人の統計的プロフィール—二〇〇人の社会・文化的傾向」『国際文化』第七号。
- 中野卓、1977、『口述の生活史—或る女の愛と呪いの近代』お茶の水書房。
- 中野卓・桜井厚編、1995、『ライフヒストリーの社会学』弘文堂。
- 歴史学研究会編『歴史学研究』〈特集 オーラル・ヒストリー〉一九八七年六月号(567号)。
- Nagelkerke, Gerard A., 1982, *The Chinese in Indonesia: A Bibliography, 18<sup>th</sup> Century—1981*, Libraray of the Royal Institute of Linguistics and Anthropology.
- Suryadinata, Leo, 1993, *Peranakan's Search for National Identity: Biographical Studies of Seven Indonesian*

*Chinese*, Times Academic Press.

Thompson, Paul, 1988, *The Voice of Past: Oral History*, Oxford University Press.

Widodo, Johannes, 1997, "The Life of the First and Second Generations of a Chinese Immigrant Family in Central Java, Indonesia (Mid-19<sup>th</sup> to Mid-20<sup>th</sup> Century)" 『歐羅巴の歴史』川口純一郎

Willmott, D. E., 1960, *The Chinese of Semarang: A Changing Minority Community in Indonesia*, Cornell University Press.

Williams, Walter L. with Claire Siverson [et al.], 1991, *Javanese Lives: Women and Men in Modern Indonesian Society*, Rutgers University Press.